

長野市における笠間稲荷信仰の地域的展開

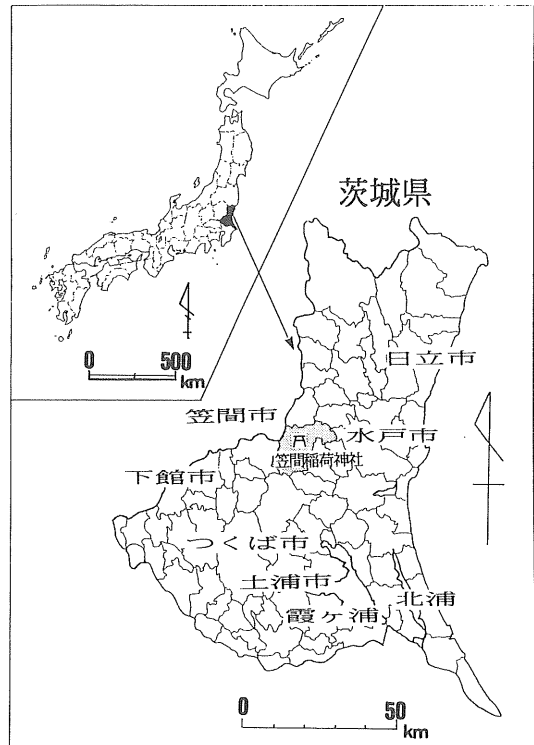
松井 圭介

I はじめに

笠間稲荷信仰は、茨城県笠間市にある笠間稲荷神社（以下笠間稲荷と略す）（第1図）に御利益を祈願する信仰である。笠間稲荷の創建は、社伝によれば650～654年頃とされているが詳らかではない。1743年、笠間城主井上正賢により社地社殿が拡張され、1747年に牧野貞通が城主になると、笠間稲荷を笠間藩の祈願所と定めて崇敬し、境内地・祭器具等を寄進した。以降歴代の笠間藩主の崇敬を得て、笠間稲荷は信仰を獲得したと伝えられている。笠間稲荷の祭神は、宇迦御魂神（うかみたまのかみ）である。宇迦御魂神は五穀を始めとする農牧、水産、養蚕、商工業、交通、火防の神として、信仰されている。

笠間稲荷に祈願される御利益の内容は、多種多様であるが、家内安全、商売繁盛、交通安全といった現世利益的な祈願が多数を占めている。笠間稲荷の門前は、四季を通じて、これらの御利益を求めて参拝する崇敬者でにぎわっている。崇敬者は、都市部の商工業者が中心であるが、五穀豊穡を祈願する農家が、農作物を献納する姿も見受けられる。

本稿では、長野市を対象地域とし、笠間稲荷信仰圏¹⁾の最外縁部において笠間稲荷信仰が、地域にどのように受容されているかを報告することを目的とする。長野市は、古くから善光寺の門前町として、また北国街道の宿場町として発達してきた。笠間稲荷信仰の長野市における展開を考えるに当たって、まず長野市の宗教法人の神社名・宗



第1図 笠間稲荷の位置（1994年）

派別分布数を示す（第1表）。長野市には1992年現在、647の宗教法人がある。仏教系では、曹洞宗の113が最多であり、以下浄土宗85、浄土真宗系の59寺院と続いている。神道系では、諏訪社の22が最多である。以下伊勢社、八幡社、稲荷社などの勧請社が比較的多いことが伺える。

第1表 長野市における神社名、宗派別宗教法人数（1992年）

神社名 ¹⁾	数	宗派名 ²⁾	数
諏訪社	22	曹洞宗	113
伊勢社	19	浄土宗	85
八幡社	12	浄土真宗系	59
稲荷社	9	真言宗系	29
飯縄社	6	天台宗系	27
天神社	5	日蓮宗系	6
秋葉社	4	臨済宗系	4
白山社	4	単立法人	9
その他	198	その他	2
計	279	計	334

（長野県宗教法人名簿より作成）

注) 1) 神社名は、宗教法人名の一部にこれらの名称が含まれている神社の総数である。なお3以下の神社は全てその他に含めた。

2) 各宗派系とは次の通りである。

浄土真宗系：浄土真宗本願寺派、真宗大谷派

真言宗派：高野山真言宗、真言宗智山派、真言宗豊山派

天台宗系：天台宗、天台寺門宗

日蓮宗系：日蓮宗、日蓮正宗、大乗教

臨済宗系：臨済宗妙心寺派、臨済宗方広寺派、黄檗宗

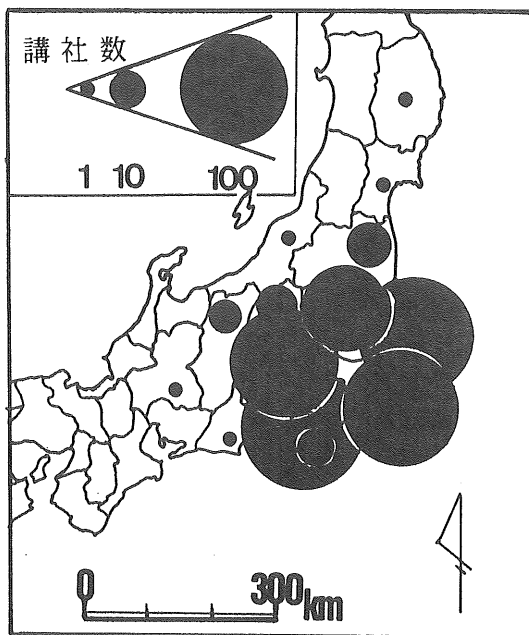
II 笠間稲荷信仰圏における長野市の位置

筆者は、1993年度に筑波大学に提出した修士論文において、笠間稲荷信仰圏の地域区分を行った。笠間稲荷信仰圏を把握する指標としては、笠間稲荷への信仰の継続性を鑑み、昇殿祈願者、産物献納者、分霊勧請者の3つを選択した。その結果、笠間稲荷からの距離に応じて、笠間稲荷信仰圏は、1)産物献納者の分布が卓越し、農耕に恵みを与える生産神としての信仰を集める第1次信仰圏（～50km圏）、2)講社の成立が盛んであり、各指標とも分布が密であることから、笠間稲荷信仰の核心地域といえる第2次信仰圏（50～150km圏）、3)昇殿祈願者、分霊勧請者の分布はみられるものの、分布密度が希薄となる第3次信仰圏（150～800km圏）の3つに地域区分ができることが明らかとなった。

た。

長野市は上記の地域区分でいうと、第3次信仰圏に属し、笠間稲荷信仰圏における最外縁地域に位置している。この地域は、いわば信仰圏外であり、信仰者を把握することが困難な地域である。しかしながら、長野市は、産物献納者こそいないものの、4つの笠間稲荷講社が活動し、また当地に勧請された分霊社を中心とする宗教活動もみられ、本地域区分に属する市町村のなかでは、例外的に信仰の盛んな地域となっている。本稿では、この笠間稲荷信仰圏の最外縁部に位置する長野市において、笠間稲荷信仰がいかに受容され、また現在においてどのような活動を行っているのかを明らかにすることが課題となる。

第2図は、笠間稲荷講の分布を都府県別に示したものである²⁾。1993年現在で511の講社がある。東京都の106が最多で、千葉県103、茨城県102、埼玉県96が続いている。長野県には全部で8の講社がある。市町村別では長野市に4、須坂市、中野市、佐久市、山ノ内町にそれぞれ1つの講社がある。



第2図 都県別笠間稲荷講の分布(1993年)

（笠間稲荷神社社務所資料より作成）

Ⅲ 長野市における笠間稲荷講社

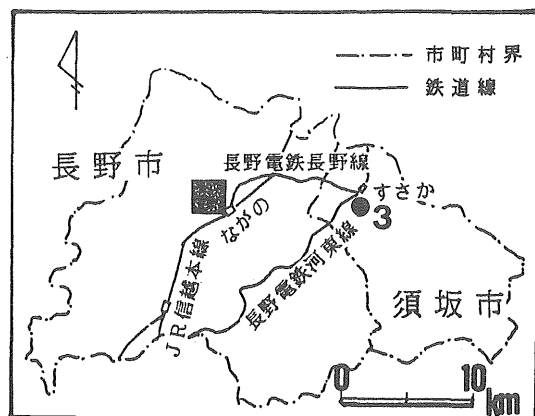
本章では長野市における笠間稲荷信仰の様態を、講社の分布及び活動状況から明らかにする。ここでは講元が長野市内に居住している4つの講（長野一心講、長野参拝講、長心講、笠間稲荷講長野分社）及び、長野市内の講から分離し、現在須坂市内に講元が居住している講1つ（みすず一心講）の計5つの講を対象とする（第3図）。

Ⅲ-1 長野一心講

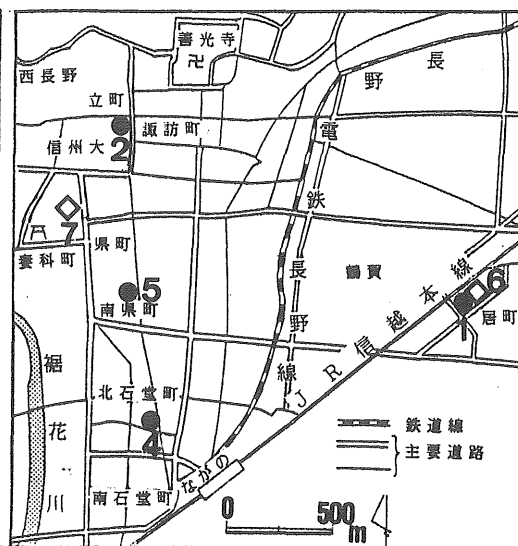
長野一心講は、長野市内にある講社の草分けの存在である。1910年代にA氏により、長野市における最初の笠間稲荷講として始められた。現在の講元は3代目であり、A氏の孫に当たる。A氏が笠間稲荷を信仰するようになった経緯は、A氏自身の青年時代の宗教体験による。A氏が、新潟県の高田で出会った行商の婦人から伝え聞いた笠間稲荷の靈驗を自ら感得し、笠間稲荷を靈驗あら

たかな神であると自覚したことを契機とした。その後高田から長野市に移住し、長野の地で笠間稲荷講を始めた。またA氏は、自らも宗教者になろうと神習教³⁾において神官の資格を得ている。

当初は12～13人という比較的少人数で笠間稲荷参拝を行っていたが、講員勧誘の成果もあり、講員数は徐々に増加し、世話人⁴⁾希望者が市内各町にあらわれた。A氏は大正年代に笠間稲荷から分霊を勧請している。この分霊は、現在でも現講元の宅地内に分霊社として祀られている（写真1）。長野一心講は1970年代の最盛期には、バス8台、300人を越える笠間稲荷参拝者を集め、長野駅から特別列車を仕立てて笠間へ参拝した年もあった。当時の長野一心講による参拝者はあまりに多く、笠間稲荷の社殿で迷子になる人が出るほどであった。往時には講員全員が、長野一心講と書かれた「たすき」をかけ、講元は旗を持って先導した（写真2）と伝えられている。長野一心講の往時は、笠間稲荷の境内に建立された参拝記念碑か



- 印は各講元居住地を表す。
1. 長野一心講
 2. 長心講
 3. みすず一心講
 4. 長野参拝講
 5. 笠間稲荷長野分社講



- ◇印は分霊社勧請地を表す。
6. 長野一心講内祠
 7. 笠間稲荷長野分社

第3図 長野市における笠間稲荷講元及び笠間稲荷分霊の分布（1993年）

（笠間稲荷神社社務所資料より作成）

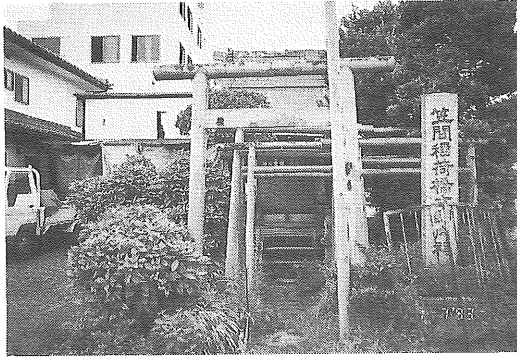


写真1 笠間稲荷分霊社（1993年6月撮影）

笠間稲荷 A 家内神社として祀られている。社の内部には、長野参拝講の参拝記念や奉納物が納められている。

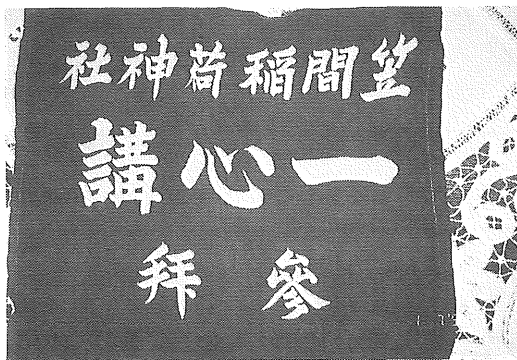


写真2 長野一心講の旗（1993年6月撮影）

1970年代の往時には、講元がこの旗を持って講員を先導した。

らも偲ばれる。講員は世話人の知己に当たる商売関係者が中心であった。けれども現在では世話人が高齢化したこともあり、講員数は減少している。

参拝は年に一回、5月に行われている。通常は2泊3日の行程で、最初の1泊は必ず笠間に宿泊する。1990年までは笠間稲荷門前にある笠間館を定宿としていたが、笠間館が1991年に廃業になり1992年より別の旅館（井筒屋）に宿泊している。笠間参拝以外の宗教活動としては次のようなことが行われている。毎年2、3月の三の午の日に、御嶽教⁵⁾

の神主を呼び、分霊社にて初午祭を行う。参加者は講元ほか世話人で、分霊社にお参りをし、玉串を供えた後に直会を行う。4月には参拝計画の立案を兼ね、世話人で温泉旅行へ出かける。4月の末には当年の笠間稲荷参拝者の人数の確認を行い、5月には笠間稲荷参拝をする。笠間から帰ってくると、今度は世話人を中心としたグループごとにテンノウアゲと呼ばれる食事会が催される。6月に世話人で打ち上げを行い、一年の活動は終わる。このように笠間参拝を除けば、活動はいずれも世話人を中心とする小規模なものである。

Ⅲ-2 長心講

長心講は1963年、長野一心講から独立する形で結成された。先述したように当時の長野一心講は、講員が300人を越える年もあり、笠間稲荷参拝の際の交通手段や宿泊先の確保にも困難な状況であった。そこで当時長野一心講の世話人グループの一人であったB氏を講元とし、立町、西長野に在住する人々を中心に長心講が新たに結成された。現在の講元は2代目であり、B氏の息子が継いでいる。

現在、笠間稲荷参拝は年に1回、5月に行われている。1992年には講員42名が、願意が書かれたお札を笠間稲荷から受け取った。このうち笠間稲荷への直接参拝者は約30人である。笠間稲荷参拝は、通常1泊2日の行程であり、バスを1台借り上げて行われる。1988年以降の宿泊地をみると、大洗、猿ヶ京、湯西川、水上などであり、関東地方の景勝地、温泉場に宿泊していることがわかる。

講元他5人の世話人を中心とし、毎年笠間稲荷参拝者を募っている。参拝者をその職種別属性からみると、商売関係者が約80%を占めている。聞きとりでは、日本3大稲荷⁶⁾の中で最も近いことが笠間参拝の理由の一つであるということであった。長心講の講員は、1960年代には平均で約70人、1970年代には約85人を数えていたが、現在では約40人と減少している。しかし講元によれば、人数が減少した分、遊山的な要素がなくなったという面もあるという。長心講では笠間稲荷の分霊社は

祀られていない。また長心講としては、年に一回の笠間稲荷参拝以外には、特別な宗教活動は行われていない。これは地元での宗教活動の核となる分霊社がないこと、及び長野一心講の人数的肥大化という、いわば人為的な理由で講が結成された点に依拠するものと推察される。

Ⅲ-3 みすず一心講

みすず一心講も、長心講同様、長野一心講から分離する形で、1973年に結成された。現講元のC氏は初代であり、長野一心講の現講元の弟に当たる。みすず一心講結成の直接の契機は、講元が社会保険事務所を営業している関係で、長野一心講が参拝する5月は、商売が忙しく参拝が困難であることであった。C氏の親は長野一心講の2代目の講元であり、C氏は幼少の折から笠間稲荷に参拝していた。

みすず一心講の現在の講員数は、約30～40人である。世話人は2名であり、毎年、固定的な参拝者は、20名程である。この人数はここ数年安定している。講員の職業としては、世話人の2名を含めて建設業関係者が多数を占めている。講員は長野市、須坂市、山ノ内町に多く分布している。笠間稲荷参拝の際は、バスを1台借り上げて、1泊2日の行程で行う。昔は長野を夜中に出発し、笠間に朝参拝するという形態であったが、現在では、朝出発し、笠間で午後2時の祈祷を受け、近在の観光地（近年では横浜、常磐ハワイアンセンター、塩原温泉など）に宿泊している。みすず一心講では、経費の講員負担を少しでも軽減しようと、バス交通費を講元が個人的に負担している⁷⁾。みすず一心講としての宗教活動は、笠間稲荷参拝を除くと特別には行われていない。しかし、講元は個人的に長野市居町にある分霊社に月参りを行っている⁸⁾。

Ⅲ-4 長野参拝講

長野参拝講は1950年頃、南石堂町内会の有志が集まって結成された。南石堂町は長野駅に近く、善光寺門前の末端部に位置し、昔から商業が盛んであった。笠間稲荷参拝の機縁は次の通りである。

昭和20年代、笠間稲荷門前旅館の女将の親戚が、南石堂町の床屋で働いていた。この人物が、旅館の宣伝を兼ね、商売神・笠間稲荷への参詣旅行を勧めるという形で、南石堂町内に参拝組織が誕生したといわれる⁹⁾。

初代の講元のD氏は、木曾御嶽教の行者であった。D氏は生来病弱であり、木曾御嶽で修行を積んだ人物であったこのD氏というカリスマ的な指導者の元に、長野参拝講では1960年代には、100人以上の講員が笠間稲荷参拝を行っていた。その後も講員数は、80～90人代を保っていたが、1983年にD氏が亡くなると、講としての求心力が弱くなり、参拝者の減少が目立つようになった。

D氏の死後、当時副講元であったE氏が2代目の講元となり、現在に至っている。筆者の調査によると、笠間稲荷講において、行者をはじめとする宗教者が講元である場合、講元の死去その他により、講元が次の代に継承されると、講そのものが衰退していく事例が多い。これは宗教者個人の持つカリスマ的魅力が、講の成立基盤の大きな要因になっているからである。ただし長野参拝講の場合、講員の減少は、カリスマ的な講元の死のみには求められるものではない。講元の死と時期を同じくして、参拝者の高齢化、町内会の人口異動などが起こり、これらの諸要因が複合しているものと推察される。

1990年代に入って、笠間稲荷へは代参講のシステムがとられるようになった。1993年には7人で代参を行い、20枚のお札を受けた。講員は南石堂町を中心に、北石堂町、鶴賀などの地区に多い(第5図)。

長野参拝講においては、笠間稲荷参拝以外に特別な宗教活動は行われていない。また分霊社も祀られてはおらず、代参者以外の講員は、笠間稲荷との関係は、年一回お札を受け取るだけに過ぎず、信仰意識は希薄であるといわざるを得ない。ただ笠間稲荷は、商売繁盛の神であるという意識はあり、講員には商業関係者が多い。

Ⅲ－５ 笠間稲荷長野分社講

笠間稲荷長野分社講（以下長野分社講）は、会名を笠間稲荷崇敬者会という。長野市妻科にある、笠間稲荷長野分社を祀る崇敬者集団として、結成された講組織である。

講員は1990年現在140名を越えている。講員は妻科町、県町、南県町、諏訪町を中心に分布している。宮司、顧問、相談役のほか、会長、副会長を含め世話人が18名おり、祭典、神社の維持管理、本社参拝といった会の運営に当たっている。長野分社講では、以下に示すような講規約を設けている¹⁰⁾。

笠間稲荷崇敬者会規約

1. この会は笠間稲荷崇敬者会と称し事務所を会長宅に置く。
2. この会は笠間稲荷長野分社（以下長野分社と云う）講加入者及びこの趣旨に賛同された者を以て組織する。
3. この会は会員相互の融和と親睦により長野分社の運営と発展に寄与することを目的とする。
4. この会に次の役員をおき任期は二年とし総会において選出する。但し留任はさまたげない。

ア 会長	1名
イ 副会長	若干名
ウ 会計	1名
エ 庶務	2名
オ 監事	2名
カ 幹事	若干名（世話人と称す）
5. 会長は会を代表し会務を統括する。

副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれに変わる。

会計は会計を掌る。

庶務は行事の実施に当たり、各種文書の発送及び名簿整備に当たる。

幹事は庶務に依頼された業務を行う。
6. この会に相談役をおき、常任相談役に就

任する。

またこの会に顧問をおくことができる。

7. この会の定期総会は毎年初午の日に開催し、臨時総会と役員会は必要に応じ会長が招集する。
8. 本会の行事は祭典および神社の維持管理、本社参拝その他会の発展に寄与する事項とする。
9. この会の経費は会費、寄付金及びその他の収入を以てする。
10. 会費は年額800円とする。
11. この会の会計年度は毎年1月1日より12月31日までとする。

附則

- * この会則は昭和54年1月1日より施行する。
- * この会則の変更は総会の評決による。
- * 笠間稲荷秋の祭典は10月に施行する。
- * この会則は平成2年4月1日より施行する。

長野分社講が、このように規約を有する確固とした講組織を形成している主要因には、分霊社の存在が挙げられよう。

長野分社講でお祀りしている分霊社は、先代宮司他5名が笠間稲荷より勧請し、現在地に祭祀したものである。祭祀年は不明であるが、第二次世界大戦以前のことと推定される。この分霊社は、商売繁盛、交通安全、家内安全の神として近隣の人々の崇敬を受け、別名「くるみ稲荷様」として、長寿長命の神として、また近年では、受験の神としても信仰されている¹¹⁾。

このように長野分社講は、笠間稲荷参拝を目的とする一般の講社とは異なり、笠間稲荷分霊社を信仰の核とする崇敬者集団が中心となり、講組織を結成している点に特徴がある。第2表は、1989年度における、長野分社講の1年間の活動を整理したものである¹²⁾。この活動報告書からわかるように、長野分社講として、定期的に行われている宗教活動は、2月の初午祭及び、10月の午の日に行われる秋祭りである。両祭りとも、宮司により分霊社にて斎行される¹³⁾。

参詣者数は天候にも影響されるが、世話人を含めて30～50人前後である。宮司より、笹に結わえられた福だるま、お札、供物などが参詣者に配られる。また希望者には、有料で長野分社名入りの絵馬が頒布される。その後近くにある妻科神社社務所で、総会を兼ねて直会が開催される。秋祭り際には、長寿長命を祈願した「安穩生涯」のお守りが参拝者に配られる。講社による笠間稲荷本社参拝が、家内安全や商売繁盛といった願意が中心であるのに対して、在地の分霊社では、交通安

全や学業成就、長寿祈願など願意が多様であることがわかる。

講社としての笠間稲荷参拝は、2～3年に一度の頻度である。主に11月に、1泊2日の日程で行われる。笠間稲荷に参拝したのち、常磐ハワイアンセンター（福島県いわき市）や日光・鬼怒川温泉などに宿泊する機会が多い。参加者は平均して20～30名である。

以上長野市内を中心に組織されている笠間稲荷講の様態を整理すると第3表ようになる。

第2表 笠間稲荷長野分社講の年間活動（1992年）

月 日	活 動	活 動 内 容	場 所
1.20	役 員 会	初午祭実施と新年度活動計画について	飲 食 店
2. 2		初午祭準備	妻科神社社務所
2. 3	初 午 祭 ・ 議 員 総 会	笹付き福だるま、お守りの配布、絵馬 有料頒布、直会	笠間分社及び 妻科神社社務所
7.21	臨時役員会	大鳥居建て替え並びに本殿修復について	妻科神社社務所
8.21		建て替え資金寄付募集許可申請書提出	長 野 市 長 宛
8.30	臨時役員会	寄付者名簿趣意書依頼について	飲 食 店
9.25	役 員 会	笠間稲荷お遷宮秋季大祭について	飲 食 店
10.10	秋 季 大 祭	秋季大祭実施、直会（参加約70人）	笠間分社及び 妻科神社社務所
10.25	役 員 会	祭典決算報告並びに本社参拝について	飲 食 店
11.8～9	本 社 参 拝	笠間稲荷参拝（鬼怒川温泉泊）（参加28人）	笠間稲荷本社
12.25		笠間分社年末大掃除並びに注連飾り	笠 間 分 社

（笠間稲荷長野分社講元引継文書より作成）

第3表 長野市における笠間稲荷講（1994年）

	長野一心講	長 心 講	みすず一心講	長野参拝講	長野分社講
初代講元の属性	宗教者	一心講世話人	一心講世話人	宗教者	宗教者 ₁₎
現 講 元 の 世 代	3 代目	2 代目	初代	2 代目	不明 ₂₎
分 霊 社 の 有 無	有	無	無 ₃₎	無	有
創 立 世 代	1910頃	1963	1973	1950頃	1930頃
世 話 人 数	7	5	2	2	18
現 講 員 概 数	50	40	30	20	140
最 盛 期 の 講 員 数とその時期	320 1970年代	100 1971	現在に同じ	100 1970年代	不明
参拝の際の宿泊地	笠間	笠間近郊の観光地、温泉地			
参 拝 形 式	総参・代参	総参	総参	総参・代参	代参

（現地調査より作成）

注) 1) 宮司1人を含む5人が笠間稲荷より分霊を勧請したことが始まりである。

2) 長野分社講では、講元という制度はなく、2年間を任期とする会長が講の代表者であり、他に分霊社の宮司がいる。

3) みすず一心講としては分霊社はないが、長野一心講の分霊社に、講元は個人的に参拝している。

Ⅳ-2 町内会を単位とする宗教組織

南石堂町の行政組織のなかには、町内で行われる祭礼を担当する祭典部が設けられている。これは、部長(1)、副部長(2)、会計(1)ほか各地区から選ばれた部員の計約20名から組織されている。祭典部が担当する町内の祭礼は次の3つである。

1) 妻科神社の祭礼

例年10月1日に行われる秋の祭礼である。妻科神社は、旧長野町内14ヶ町を氏子圏とする神社であり、秋の祭礼では、14ヶ町を御輿が巡行する。南石堂町内も大通りを中心に御輿が巡行する。妻科町、県町、末広町などでは、町内で御輿を所有し神社の境内に保管しているが、南石堂町ではそのような御輿はない。町内全体が氏子圏であるが、町内全体での氏子意識は高いとはいえない。祭礼に必要な経費は、商店会を中心とする寄付によってまかなわれている。南石堂町の氏子総代は現在、長野参拝講元であるE氏が務めている。

2) 長野びんずる

毎年8月に夏祭りとして行われる長野市の市民祭である。1971年から市の商工会議所、青年会議所、商店会連合会、観光協会、区長会などが主体となって行われている。1994年で第24回を迎えた。1993年では、参加団体が270、1.7万人の参加者があり、23万人の観客があった。当日は、南石堂町でも子供御輿を出す。祭りのクライマックスは夜19～22時に行われる「びんずる踊り」である。「びんずる」は、もともと善光寺の祭礼であり、善光寺の門前町として発達してきた長野を代表する祭りであった。現在では宗教色は希薄となり、市民祭としての性格を強めている。

3) 三峰神社講

南石堂町内会で組織されている講に、三峰神社講があり、長野市南石堂町講という。これは埼玉県の三峰山にある三峰神社に対する代参講組織である。三峰神社は、火事・盗賊除に利益があるといわれ、中部地方、関東地方を中心に広域の信仰圏を有している。特に長野県内の市町村では、集落の区、坪などを単位として代参講を組織している地域が多い。南石堂町には、分祠社である三峰

神社が祀られている(写真3)。この三峰社は、昭和初期には、屋敷神として近隣の宅地内に祀られていたものが、1931年頃現在地である南石堂町公民館敷地内に移されたものである。

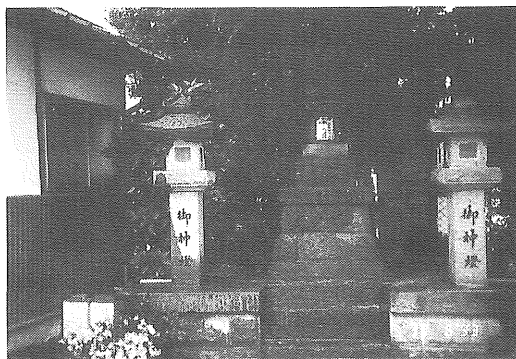


写真3 南石堂町の三峰神社(1993年6月撮影)

三峰社では、南石堂町の人々が中心となり、春(4月12日)秋(9月12日)の年二回祭礼が営まれている。春の祭礼では、近住の神主が祝詞を挙げる。この神主は長野分社講の宮司でもある。参加者は町内会の役員であり、町内安全が祈願される。秋の祭礼は五穀豊穡の祭りである。町内の人々はもちろんのこと、NTTほかの事業所も多数参加して行われる。子供御輿と成人御輿が出て、町内を隅々まで巡行するほか、福引き会などが催され、祭礼終了後には直会が行われる。

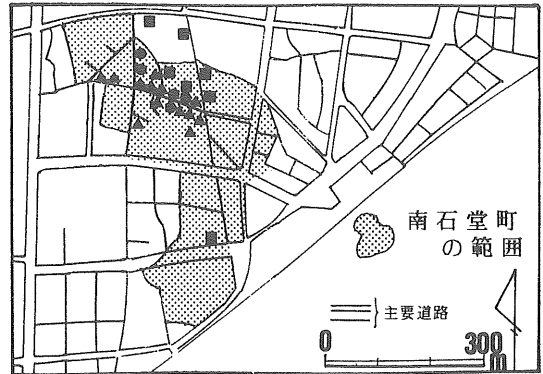
三峰本社への代参は、毎年8月の末に行われている。代参者は祭典部長、副部長、会計の4名である。代参にかかる経費は、約14～15万円であり(1993年現在)、特別会計が組まれている。代参者は、三峰本社で参拝を済ませて帰ってくると、町内の各戸に「諸難防・火防盗賊除」と書かれたお札を配る(写真4)。またこの代参とは別に、4～5年に一度の頻度で、参加希望者を募り、三峰本社への団体参拝が行われる。参加者は約40人であり、婦人が多い。団体参拝の際には、バスが一台借り上げられる、

南石堂町町内の産土社(三峰神社)の祭礼は、



写真4 三峰神社のお札（1993年6月撮影）

このお札は、三峰神社に祀られていたものである。同様の札が氏子である各戸にも配布され、祀られている。



- 笠間・戸隠両講の講員
- 笠間講の講員
- ▲ 戸隠講の講員

第5図 南石堂町における笠間講、戸隠講の議員分布(1993年)
(現地調査より作成)

比較的簡素になっているものの、三峰本社への代参や団参は、定期的に行われている。しかし神社の維持運営は、商店街の人々を中心になされており、新住民の関心は薄い。

Ⅳ-3 町内会を単位としない宗教組織

南石堂町には、町内会を組織の単位としない、自発的な宗教組織として、先述した笠間講（長野参拝講）のほかに、戸隠講（長野市参拝講）がある。以前には豊川稲荷講（愛知県豊川市）、成田山講（千葉県成田市）なども組織されていたが、1980年頃には消滅した。また町内にある宗教施設として、天理教水簀刈（みすずかる）分教会がある。

1) 戸隠講

戸隠講は、戸隠村にある戸隠神社中社への参拝講である。戸隠神社は、農業神、作物神として、全国に広い信仰圏を有している。長野市参拝講は、35～36人の講員があり、南石堂町内に居住している人は約20人である。毎年夏に17～18人で参拝している。御師は中社のF氏である。また2月にはF氏から講元あてに配札され、講元から各講員へと配られる。講員の高齢化もあり、参拝者数、講員数とも近年減少の傾向にある。南石堂町における戸隠講員の分布を示したものが第5図である。

平和通り商店街を中心に講員が分布していることがわかる。講員は全て知己であり、隣近所の仲間が集って年に一度戸隠神社へ参拝し、お札を頂くという組織となっている。商売関係者が多い。

第5図には、戸隠講員とともに、南石堂町（一部北石堂町を含む）における笠間講員（長野参拝講）の分布を示した。願意はともに家内安全、商売繁盛が主であり、共通性が高い。戸隠講、笠間講の両講に所属している人は5人いる。両講の講員の分布を比較すると、笠間講よりも戸隠講の方が地縁的な結びつきが強いことがわかる。これに対し笠間講では、100人以上の講員がいた1970年代には、南北石堂町のみならず、鶴賀、稲葉、三輪など長野市の広域に渡って講員が分布していた。現在においても、これらの地域に講員は散在しており、笠間講は、笠間稲荷参拝を核とした組織として、機能しているものと考えられる。

2) 天理教水簀刈分教会

本分教会は、1942年に長野県教務本庁として建てられたものである¹⁴⁾。したがって、布教者が教勢を広めることによってではなく、本部直属の事務機関として教会が設立されたので、地元とは関わりの薄い教会となっている。1993年現在、南

石堂町には本教会の信者はいない。現教会長も天理から派遣されてきている。しかし現教会長のG氏は、南石堂町の清掃、美化を担当する環境事業部長を勤められており、個人的には町内との結びつきは強い。

V おわりに

以上本稿では、笠間稲荷信仰圏の最外縁部にあたる、長野市における笠間稲荷信仰の展開を、笠間稲荷講の活動、町内にある他宗教組織との関わりといった視点から記述してきた。その結果明らかとなった知見は以下の通りである。

1) 長野市を中心として、5つの笠間稲荷講が活動している。いずれの講も講員には商売関係者が多く、同行仲間型¹⁵⁾の講である。このうち最も成立期が古い講は、長野一心講であり、80年以上の歴史を有している。長心講、みすず一心講は、長野一心講の講員数の増加などを要因とし、1960～1970年代に長野一心講から独立する形で誕生した。他の2講は、長野一心講とは別に組織された講である。長心講、みすず一心講を除けば、宗教者が初代講元あるいは宮司という形で関与している。

2) 長野一心講と長野分社講では、それぞれ笠間稲荷の分霊社を祀っている。分霊社は、長野一心講では講元の自宅敷地内に、また長野分社講では講員宅の敷地内に祀られている。他の3講では分霊社は祀られていない。この2つの講では、笠間稲荷参拝以外に、分霊社において、初午祭や秋祭りといった宗教活動が営まれている。これに対し、分霊社を祀っていない他の3講では、笠間稲荷参拝を除くと在地での宗教活動は、ほとんど行われていない。このことから分霊社が、在地にお

ける笠間稲荷信仰の聖地としての機能を担っていることがわかる。

3) 長野一心講、長心講、長野参拝講では、近年講員数の減少が顕著である。3講とも、1970年頃に最盛期があり、100人以上の講員が笠間稲荷参拝を行っていた。近年における講員数の減少は、娯楽の多様化という社会経済的な要因や、世話人の高齢化に伴う講の内部組織の脆弱化が要因として指摘できる。またさらに重要な点として、これらの講の場合には、講元が2、3代目へと世代交代している点を指摘することができよう。特に験者系の宗教者が初代講元となって講が成立した場合、講の成立が講元自身の宗教的魅力に起因しており、講元の交代によって、講の形成基盤が崩れる場合が多い。長野一心講や長野参拝講の場合、講員の減少は、宗教的カリスマ者を失った講の問題としても考えることができよう。これに対して長野分社講では、独自の講規約を持ち、分霊社を中心に笠間稲荷参拝の他にも在地の宗教活動が行われている。その結果、講組織は安定しているものと考えられる。

4) 南石堂町では、笠間講の他に、戸隠講と三峰講が組織されている。戸隠講は、家内安全、商売繁盛といった祈願内容が主であり、笠間講と共通した宗教的志向性を有している。三峰講は南石堂町の町内会で組織されている講であり、春秋の祭礼と、定期的に三峰本社への代参、団参が行われている。これらの講はいずれも地縁集団を核として講が組織されている。両講とも笠間講との競合関係はなく、複数の講に加入している人も多い。笠間稲荷講の組織は、世話人が強い影響力を有している。講員は地縁的な組織を越えて、世話人の知己の商売関係者などに広がっている。

現地調査の際には、笠間稲荷講元の皆様、南石堂町の区長をはじめとする皆様方に多大な御協力を頂きました。また本報告書作成に当たっては、奥野隆史教授をはじめとする筑波大学地球科学系の諸先生方には、終始御指導を賜りました。以上記して厚く御礼申し上げます。

〔注および参考文献〕

- 1) 本稿で用いる笠間稲荷信仰圏とは、笠間稲荷を崇敬する信仰者が分布する範囲を意味する。
- 2) ここでいう笠間稲荷講とは、1988年1月～1993年5月の間に、一度でも笠間稲荷に参拝をしたことのある講社を指す。なお笠間稲荷では、12人以上の団体を以て講社としている。
- 3) 教派神道の一つ、1872年神道神習派としてとして独立した。A氏は、1941年3月に当時の神習教管長芳村忠明から免許を受けている。
- 4) 世話人は、講元を支える補佐役であり、人数は講によって異なる。通常世話人は、笠間稲荷参拝の際の、講員への連絡、バスの差配、会計などを分担する。笠間稲荷講の講員は、固定的ではなく、年によって変動があり、世話人の力量によっては当年の参拝者数に大きな影響が出ることもある。
- 5) 木曾御嶽山を神人交遊の神園とし、仰慕と登拝の二道を修めて、その靈気に浴し、六根の清浄によって神性を顕現、死生不二の信念に徹するとする教え。1882年に御嶽教として開教。(松野純孝編(1984):『新宗教辞典』東京堂出版、52-53.)
- 6) ここでは、伏見稲荷(京都)、豊川稲荷(愛知)、笠間稲荷を指す。しかしながら3大稲荷とは通説であり、祐徳稲荷(佐賀)、竹駒稲荷(宮城)を入れるといった諸説がある。
- 7) 1993年には約48万円であった。
- 8) この居町の分霊社は、長野一心講の講元宅に祀られているものであり、みずす一心講講元の本家である。
- 9) 現講元E氏からの聞きとりによる。
- 10) 笠間稲荷講全般において、現在講規約を成文化している講は少ない。分社講の事例は貴重であると考えられるので、本文中に規約を示す。
- 11) 笠間稲荷長野分社講資料「笠間稲荷講設立趣意書」より引用。
- 12) この事業報告書は正式には、「笠間稲荷長野分社事業報告」となっており、講の事業報告書という形態はとられていない。
- 13) 1990年度の初午祭の案内書は以下のような文面である。

厄おとし長野の笠間稲荷さん

『初午祭り』のおしらせ

初午にお参りすると健康で豊かな日々が過ごせると言われています。皆さんお揃いで講中の方々と一緒に、あらたかな笠間稲荷長野分社の初午祭にご参拝下さい。

長寿長命の『くるみなり』と昔から言い伝えがあります。安穏生涯を祈り、また、商売繁盛、交通安全、合格祈願など、それぞれ皆様の願いごとを叶えて頂くよう祭典を謹行致します。ー以下略ー
- 14) 現在教務本庁は、長野県全体を統括するうえでの交通の便を考えて、塩尻に移されている。
- 15) 同行仲間型の講は、笠間稲荷参拝を目的として組織された集団を単位として講が組織されている場合を意味している。構成員が笠間稲荷の御利益を求めて、既成の社会集団と基盤を別にして、講社組織を結成する場合である。